

3. 昭和前期大陸を訪れた若者たち：1927年徳島初の海外修学旅行

荒武 達朗

はじめに

ここ半世紀以来の海外旅行ブームの中で、教育活動の一環として海外修学旅行を組み入れる学校も少なくない。修学旅行の歴史を回顧すれば、1886年（明治19年）の東京師範学校の長途遠足がその始まりであったとされる。もともと軍事訓練的な要素が強かったが、1901年（明治34年）に兵式体操が分離され、見物見学主体の修学旅行が出現した。その後、大正から昭和前期にかけて盛んに実施され、女子学生の修学旅行も一般化した⁽¹⁾。

さらに学生たちは日本本土から外へと出て行くようになる。このような海外修学旅行は日清戦争後の1896年（明治29年）に長崎商業学校学生による上海での調査が嚆矢である⁽²⁾。1905年（明治38年）の日露戦争の勝利、続いて1910年（明治43年）の韓国併合の後には戦跡・植民地の見学を通して国民的アイデンティティを高めるという要素が加わりさらに多くの学校が大陸修学旅行を学校行事に採り入れるようになった。日露戦争翌年の1906年（明治39年）には文部省と陸軍省が企画し全国各道府県の中学生・教職員延べ3,694人が3週間にわたる満洲修学旅行を実施した⁽³⁾。後述するように徳島中学校（現、徳島県立城南高等学校）の学生もこの企画に参加している。

周知の通り1937年（昭和12年）に日中戦争が全面化し、翌38年4月には国家総動員法が公布され人的・物的資源の統制運用が強化された。一般的に戦時色の強まる暗い時代としてイメージされる時期である。だが高岡裕之氏は1930年代には各種形態での旅行ブームが生まれたことを明らかにしている。戦争の拡大局面では一時的に人びとの旅行も自粛されるが、戦局の膠着と戦死傷者数の減少によって再び人びとの旅行は隆盛へと向かう。国家による国民精神涵養の目的を付与されることで伊勢神宮など建国神話に関連付けた聖地巡拝が行われ、それは1940年（昭和15年）、皇紀2600年奉祝行事の大々的な参加へと繋がっていったという⁽⁴⁾。日中戦争の下でも人びとの消費活動、娯楽も盛んに展開され1941年（昭和16年）の太平洋戦争開始後まで続いた。この1940年（昭和15年）前後の世相と旅行についてはケネス・ルオフ氏の著作に詳しい。純然たるレジャーに対する風当たりは強くなっていったが、皇室・神話に関わる聖蹟・聖地への巡拝には何百万人もの国民が参加し、さらには植民地朝鮮、また関東州・満洲国へも学生たちを含む数十万人の人びとが観光に訪れた⁽⁵⁾。実質的に観光旅行的様相を呈していた修学旅行は1940年（昭和15年）6月に禁止が呼びかけられるものの、その後も聖地を巡拝する形式で修学旅行は継続した。敗色の濃くなる1943年（昭和18年）以降は観光どころではなくなり、社会から急速に旅行は姿を消した。

筆者はこれまで「戦前期の四国の人びとが関わった外の世界」について考察を深めてき

た。例えば大正から昭和にかけての徳島では中学校卒業後に上海の東亜同文書院を進学先と選んだものがいた。県より奨学金が支給されるという好条件もあり、毎年2、3名の学生が渡航し、その卒業後には東アジアと関わる職業に就く者も多かった⁶⁾。ではその他数多くの一般的な学生は如何なる場で如何に外の世界を見ていたのだろうか。本稿は中等教育機関の学生が外の世界に触れ、知見を広げる場としての修学旅行、特に海外修学旅行を考察の対象とする。もっとも当時小学校より上の学校へ進学する割合は人口の一割に満たず、彼ら彼女らを同年代の青少年層の典型と見なすことは出来まい。このような限界はあるにせよ、学生たちは卒業後に社会の中核を担うことを期待されていたのであり群体として検討に値すると言えよう。

まず第1節では当時のメディアに掲載された旅日記を基に昭和前期の徳島県の中学校、高等女学校、師範学校、実業系学校が実施した修学旅行の実像を概観する。徳島県では徳島県立商業学校（現、徳島県立徳島商業高等学校）、徳島県女子師範学校（女師）と徳島県立徳島高等女学校（徳島高女、両校は併設されており本稿では「女師・高女」と表記、現、徳島県立城東高等学校）が大陸での修学旅行を実施した。第2節ではこの内、徳島商業学校の大陸修学旅行（満鮮旅行、鮮満旅行、満韓旅行などの表記があるが、本稿では「大陸修学旅行」と表記）を中心として学生たちが何を目にしたかを考察する。彼らの称するところでは、これが徳島県最初の海外修学旅行であった。この修学旅行を検討することで“昭和前期徳島のグローバル化”の一端を明らかにできると考える。

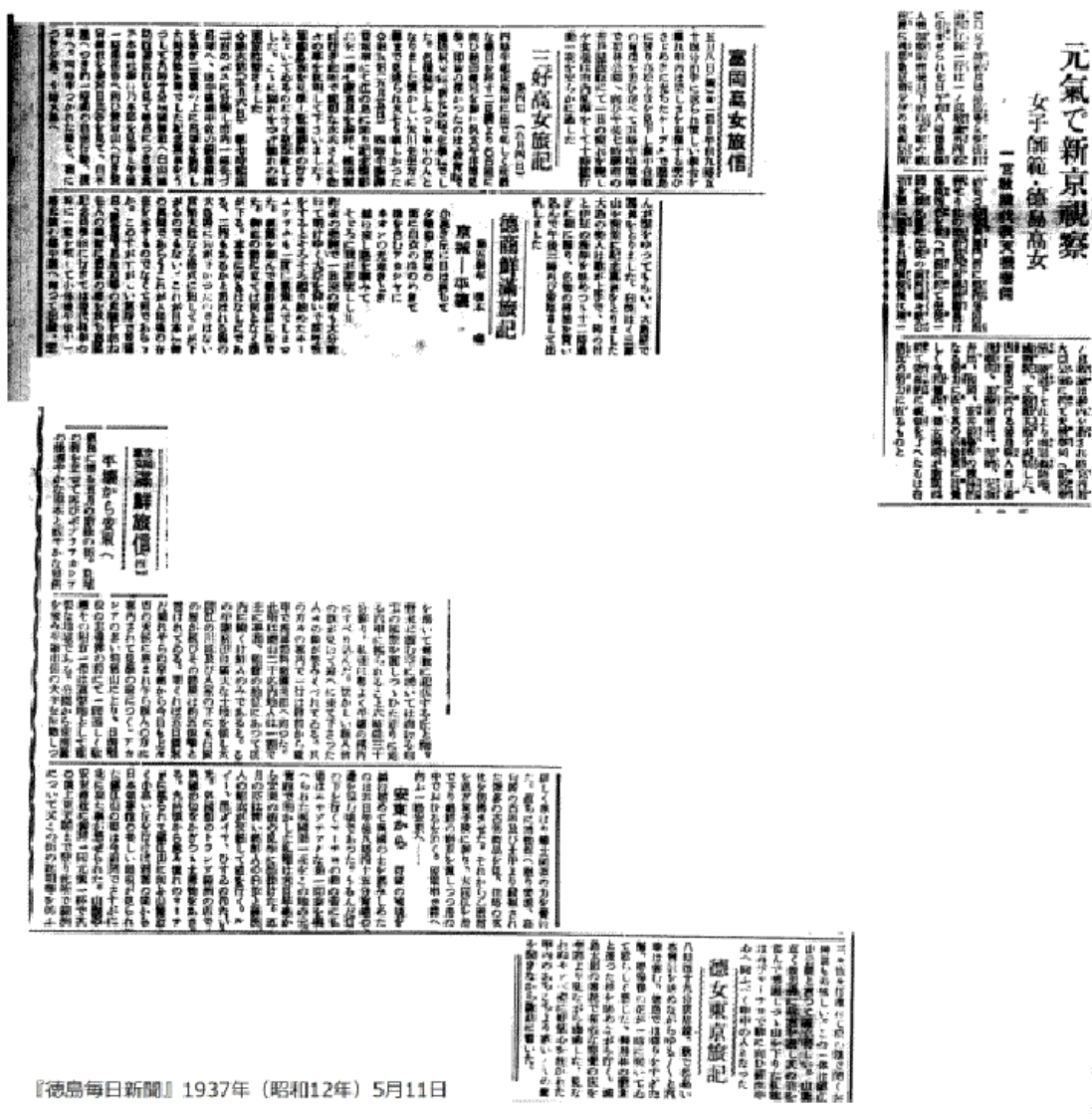
第1節 昭和前期『徳島毎日新聞』に掲載された“旅日記”

当時の『徳島毎日新聞』の紙面には修学旅行が行われる時季になると学生の記した「旅日記」が掲載された。興味深いことに誌面に掲載される旅日記は高等女学校のものが多く中学校のそれが少ない。この理由は定かではないので大方の教示を請いたい。何れにせよ彼ら彼女らが記した旅日記から当時の旅行の諸相、学生が得た知見と印象、ひいては当時の世相を知ることが出来る。この昭和前期各年の修学旅行シーズン（4～6月）の『徳島毎日新聞』の徳島県立図書館所蔵状況を文末附表の冒頭にまとめた。残念ながら1929年（昭和4年）～33年（昭和8年）の間は欠号が目立ち詳細を知ることが出来ない。

このような旅日記はいつ頃から掲載されるようになったのだろうか。1926年（大正15年）、1927年（昭和2年）、28年（昭和3年）の『徳島毎日新聞』に関連する記事をほとんど見いだすことができない。1926年（大正15年）5月6日に師範学校、6日に女師・高女、10日に農業学校の修学旅行に関する記事が掲載されるが、日程のみの短信であった。5月19日、22日、28日、29日、[この間欠号多く不明]6月9日には「三好高女旅信」が掲載された。翌、1927年（昭和2年）度では5月9日に県立農業学校、5月10日に名西高女、女師・高女の県外修学旅行に関する記事がそれぞれ1本掲載されるが、これもまた日程程度の簡単な記事である。この他に女師・高女学生の私信が5月18日、22日、26日、27日、29日、30日、31日の紙面、県立農業学校の学生の日記が5月24日の紙面にそれぞれ載っ

た。また 6 月 4 日の報道より同校が修学旅行の報告会を開催したことが知れる。昭和初年の旅日記は後の時期に比べれば質・量ともに目立たない。続く 1928 年（昭和 3 年）度もほぼ同様で、修学旅行は世間の耳目を集めなかったようだ。

ところが 1934 年（昭和 9 年）度から 1940 年（昭和 15 年）度には多くの旅日記が紙面に見られるようになる。文末附表は徳島県立図書館に所蔵される 1934 年（昭和 9 年）以降の修学旅行の日記を学校別、掲載日時順に整理したものである。前述の通り 1929 年（昭和 4 年）～33 年（昭和 8 年）の『徳島毎日新聞』の所蔵には欠号が多い為、この傾向がいつ頃から顕著となるのかは不明である。おそらくはこの 5 年の間に新聞に旅日記を掲載するという風潮が生まれ、ニュースとして人びとに伝える価値のあるコンテンツとなったと考えられる。この点は後考に期したい。



以上は『徳島毎日新聞』1937 年（昭和 12 年）5 月 11 日の複数頁に掲載された旅日記を抜粋、一枚に再配置したものである。右上は女師・高女が満洲国の新京にて鄭孝胥國務総

理を表見訪問した記事（「元気で新京視察」）である。その他、上から順番に富岡高女（「富岡高女旅信」）、三好高女（「三好高女旅記」）、徳島商業学校の大陸修学旅行（「徳商鮮満旅記」）、女師・高女の大陸修学旅行（「女子・高女満鮮旅信」）、同じく東京旅行（「徳女東京旅記」）の日記・私信が同日に掲載されたことが分かる。高等女学校の修学旅行に対する世間の関心の高さも知ることが出来る。

文末附表によれば1934年（昭和9年）には8校、1935年（昭和10年）は9校の旅日記が紙面に掲載されたことが分かる。1936年（昭和11年）は二・二六事件が発生、この後軍部による統制が加速するが、庶民の暮らしに直ちに影響を与えたとは思えない。当年は10校の修学旅行の旅日記が載った。1937年（昭和12年）の旅日記は7校分だけであるが、これは徳島県立図書館の所蔵に欠号が多く確認できないことも一因である（4月及び6月1-12日未所蔵）。この年は修学旅行シーズンが終わる6月に満洲農業移民の送出が本格実施へと移され、7月には日中戦争全面化の契機となる盧溝橋事件が勃発した。

1938年（昭和13年）には戦局の拡大と戦死傷者の増加が地域社会の人びとにも実感されるようになった。4月に満蒙開拓義勇軍が徳島からも出発するなど、次第に戦時色が強まっていった。この年の紙面は各地で実施される村葬や慰霊祭の記事が多く見られるが、修学旅行は停止されることなく実施されていたようだ。ただしこの年の旅日記は6校に止まった。世相を反映する一例を示せば、下図のように各村での慰霊祭の実施（「牛島村葬」「大山村葬」）が伝えられる一方、徳島商業学校の大陸旅行日記（「徳商鮮満旅行団」）が掲載されている（下段）。また左の広告は前線への慰問袋の販売を「僅か四、五銭の送料で戦線の勇士が大喜びの慰問品」と宣伝する。



教科書的に言えば1930年代後半は人びとの暮らしも次第に戦時色・統制色が強まってくると考えられている。だが1938年（昭和13年）10月の武漢占領以降は戦局は比較的小康状態になった。1939年（昭和）は5月にノモンハン事件が勃発するものの、戦争はまだ大陸の出来事であり、内地の人びとはまだ平和と大衆文化、消費や娯楽を楽しむ機会に恵まれていた。この年は前年より微増し8校の旅日記が見られた。その行き先も、女師・高女と徳島商業の朝鮮・満洲行きを始め、関東、伊勢、京都奈良、北陸と、これまで同様の観光旅行的な性格を帯びていた。

翌1940年（昭和15年）は7校へと僅かに減少したにすぎないが、旅日記自体が短く簡素化されたように見える。同年6月、全国的に不要不急の修学旅行の自粛が求められ、各

校の修学旅行は縮小した。また女師・高女の朝鮮・満洲旅行はその直前になって中止が決定した。

「交通輸送の関係上修学旅行団の口止が叫ばれてゐる際、徳島女子高女校の満鮮修学旅行も六月四日出発予定であったが今に文部省の許可が来ないので半ば中止の形大となつてゐるが両校では許可あり次第プランを立直し決行する事となつてゐるが……今の処許可が来ないので行悩んで居る。尚関東方面の修学旅行団は予定の如く行ふ筈である。」（「女師高女校満鮮旅行行悩み」『徳島毎日新聞』昭和15年5月20日）

記事によれば関東方面の旅行は実施の見込みであったが、大陸修学旅行については本来は行く予定で準備を進めていたところ出発直前になつても文部省から許可が下りなかつたようである。この年、徳島商業学校の大陸修学旅行も行われることはなかつた。同年6月には修学旅行に対する規制が強くなり、観光的要素を排除する傾向が生まれた。その動向を反映して阿波中学などは「聖地巡拝」と称して伊勢神宮など皇国神話に関連した土地を訪問する修学旅行を実施するのである。そしてこの年9月、北部仏印進駐、日独伊三国軍事同盟にて日本と米英との対立は激化、翌年の対米英開戦へと至つた。

第2節 徳島県立徳島商業学校の大陸修学旅行：徳島県初の海外修学旅行

日露戦争後の1906年（明治39年）7月から8月にかけて、全国の中学生・教職員延べ3,694人が文部省と陸軍省の企画に参加し満洲を訪れた。徳島でも徳島中学校（現、徳島県立城南高校）の学生が1906年（明治39年）7月から8月にかけて大陸を訪問した。高媛氏のまとめるところでは徳島中学校の14名の学生と教諭1名が参加したこととなっている。また『徳島中学校城南高校百年史』は「満洲旅行」というコラムを設けその事実を簡単に記している。当欄では監督が“鞍橋先生”と記載されるが、一方高媛氏の論考の巻末附表では“倉塚源太郎”となっている。参加者として第5年生割石四郎、原菊太郎、第4年生武田次郎、横田精一、第3年生大西嘉七、蜂須賀喜彰、那波利貞の7名の名前を記している⁽⁷⁾。この那波利貞氏は徳島出身の東洋学研究者として著名であり、若き日の彼が満洲で何を見たかは興味深い問題であるが詳細は不明である。ただし徳島中学校の1906年（明治39年）の満洲旅行は全国的な企画への応募であり学校独自が計画したものではなかつた。この徳島中学校有志の満洲渡航もまた検討すべき課題であるにせよ、徳島の学校が主体的に取り組んだ試みとしては、徳島県女子師範学校・徳島県立徳島高等女学校（女師・高女）と徳島県立徳島商業学校の2つを挙げることができる。

この中で女師・高女の大陸修学旅行については井上銀晴編『続・帰らざるふるさと徳島』所収「朝鮮・満洲修学旅行」と題する記事と写真に回顧されていることから、県民の中である程度の認知度がある⁽⁸⁾。1942年（昭和17年）刊行『創立四十周年記念沿革史』によれば大陸修学旅行は1928年（昭和3年）に本校に赴任した田辺校長の発案に依るものであるという。同校長は前任地が熊本県第一師範学校であり、1926年（大正15年）に大陸修学旅行を実施した経験があつた。それをもとに1930年（昭和5年）に女師・高女でも実施す

る運びとなった。同沿革史は、

「然も之は、本県として男女を通じ団体の種類を問はず、鮮満への団体旅行を実施する最初の試みとして、尠からず世人の注意を惹いた。」

と記し、同校の試みが県内初であるとする⁽⁹⁾。

一方、徳島商業学校の大陸修学旅行は女師・高女のそれに比べて知名度が低く後に言及されることはない。しかし同校編纂の『徳商五十年史』によれば「本校における初の試みとして」1927年（昭和2年）5月2日に「第1回鮮満旅行」が実施されたと述べている。当時の『徳島毎日新聞』の記事にも「徳島県最初の此の大旅行の決行」と報じられているので、徳島初の学校主催の大陸修学旅行は徳島商業学校によって実施されたとと言える⁽¹⁰⁾。

『徳商五十年史』は校友会誌（第22号、筆者未見）を引用して当時の事情を次のように伝えている。

「『一寸毛色をかへて鮮満地方へ修学旅行をしたら』とは学校での可成り長い間の懸案だったのです。でも従来どうしたものか—或は未だ機運が熟さなかったのか—生徒間にあまり、さうした方面への興味を、そそらなかつたようです。『鮮満へ行っても悪くはないが、矢張り手近な関東地方へでも行く方が面白いよ』といふような訳で今年（昭和二年）卒業した先輩なども、その修学旅行をする時に『内地』『朝鮮』とに分つて札入をして見たが、後者への希望者がその半数に過ぎなかつたといふことです。……。然し『蒔いた種は何時かは生へる』といふたとへの如く自然的の現象か或は時代の推移に伴ふ近代的副産物たる—人口増殖—食糧問題—移民奨励等々によって、漸次人心を浸蝕しつつある海外発展思想に不知不識の間に刺戟を受けたせいか『五年生になったら鮮満へ行くんだ』といふ私達の斯うした考えは、いつとはなしに固く強いものになってしまった。そして四年生の時には、その事に関して主任の先生方から得た口振りから私達のさうした強固さは更に確実性を帯びて来た訳です。」

この回想によれば校内で大陸修学旅行について数年前から検討されていた。しかし当の学生たちの間では盛り上がり欠けていたようである。「関東地方へでも行く方が面白い」という言葉は学生の意識が内地以外にはそれほど向いていなかったことを示している。本節末尾でも触れる様に当時の徳島は俗に「進取の気風」「海外雄飛の氣象」乏しき土地として自嘲気味に語られるところであった。しかし大正から昭和に変わる頃には人口増加、食糧問題、移民などの問題が議論される中で対外拡張の気運が高まり、それと共に大陸修学旅行も実施が検討される様になった。そしてそれが1927年（昭和2年）度に徳島県立商業学校5年生の学生（16歳）の徳島最初の“鮮満修学旅行”に結実したのである。

この大陸修学旅行の旅日記が『徳島毎日新聞』昭和2年5月6日から6月10日までの紙面に掲載されている。記事の構成は次の通りである。

豊川章一「徳商昭和二年度鮮満旅行記」『徳島毎日新聞』昭和2年5月6日

豊川章一「徳商昭和二年度鮮満旅行記（二）」『徳島毎日新聞』昭和2年5月7日

豊川章一「徳商鮮満旅行記」『徳島毎日新聞』昭和2年5月10日

豊川章一「徳商鮮満旅行記」『徳島毎日新聞』昭和2年5月11日
☆「徳商学生団来る 県人の熱誠なる歓迎」『徳島毎日新聞』昭和2年5月12日
豊川章一「徳商鮮満旅行記」『徳島毎日新聞』昭和2年5月12日
豊川章一「徳商鮮満旅行記」『徳島毎日新聞』昭和2年5月13日
豊川章一「徳商鮮満旅行記」『徳島毎日新聞』昭和2年5月14日
岡田俊太郎「徳商満鮮旅行記」『徳島毎日新聞』昭和2年5月22日
岡田俊太郎「徳商満鮮旅行団通信」『徳島毎日新聞』昭和2年5月23日
岡田俊太郎「徳商満鮮旅行団通信」『徳島毎日新聞』昭和2年5月24日
岡田俊太郎「徳商満鮮旅行記（四）」『徳島毎日新聞』昭和2年5月26日
岡田俊太郎「徳商満鮮旅行記（六）」『徳島毎日新聞』昭和2年6月1日
※5月26日～6月1日に（五）無し。この6月1日の記事が（五）か。以下同じ
岡田俊太郎「徳商満鮮旅行記（七）」『徳島毎日新聞』昭和2年6月3日
岡田俊太郎「徳商満鮮旅行記（八）」『徳島毎日新聞』昭和2年6月5日
岡田俊太郎「徳商満鮮旅行記（九）」『徳島毎日新聞』昭和2年6月7日
岡田俊太郎「徳商満鮮旅行記（十）」『徳島毎日新聞』昭和2年6月8日
岡田俊太郎「徳商鮮満旅行記（十一）」『徳島毎日新聞』昭和2年6月9日
岡田俊太郎「徳商満鮮旅行記（十二）」『徳島毎日新聞』昭和2年6月10日

備考：☆印は徳島毎日新聞社京城支局による報道記事である。

以上18編の日記は参加した5年生2名の執筆によるもので、前半部分、出発から朝鮮半島を抜けるまでが豊川章一氏の担当、後半部の朝鮮国境から満洲、帰国までが岡田俊太郎氏の担当であった。“徳島初”であるが故か、各編が相当の分量を有し旅行の様子を詳細に伝えている。執筆者が旅先で何を見、何を感じたかが記されており史料価値が高いが、紙幅の関係上その全文を掲載することはできない。本節では一部を抜粋しつつ大陸修学旅行の諸相、学生たちの見た朝鮮・満洲、そこから得た印象を数点紹介するに止める。引用に際しては“『徳新』掲載日時”とし、執筆者と記事標題は省略する。

①昭和二年度徳島商業学校大陸修学旅行の概要

まず日記の記述から彼らの旅程を整理する。5月6日の記事は出発の前段階から準備の様態を記している。4月11日に大阪の鮮満案内所員が徳島に出張し滴翠閣にて鮮満旅行宣伝活動写真を徳商生に向けて上映した。その後諸準備を経て、5月1日、すなわち出発の前日に同所員が再度来徳し、内地鮮満周遊券と旅館券を交付したという。翌5月2日、空模様は「然し天候を憂ふる色が時々現れる『雨かなア』実になさけない声だ」とすぐれなかったが、「校長を始め先生達や後に残る友達が見送りに来て呉れ」「旅行隊は徳日新聞写真班のカメラに収まり」「汽笛一声我々徳商旅行団は懐しの徳島に暫くの別れを告げ長途の旅へと上った」のである（『徳新』5月6日）。以下が旅日記より読み取れる旅程である。上の新聞掲載日時と対照すると、朝鮮国境出国までは旅先より日記を郵送し、満洲入域以

降はおそらくは帰徳後に新聞社に原稿を渡したと推測できる。

- 5月02日 出発 徳島→小松島→兵庫 神戸自由行動 →車中泊
5月03日 →海田市→呉 呉軍港見学 →広島 広島大本営等見学 広島泊
5月04日 広島→宮島 宮島見学 →下関 下関自由行動 →船中泊
5月05日 →釜山 龍頭山見学 →大邱 大邱市内・商業学校見学 →車中泊
5月06日 →永登浦→仁川 市内・港湾・月尾島見学 →京城 朝鮮神宮参拝
朝鮮物産陳列所見学 夕方市内自由行動 10時旅館帰着 京城泊
5月07日 朝鮮銀行・南大門・府庁・京城普通学校・総督府・昌慶苑見学
→車中泊
5月08日 →平壤 平壤神社・玄武門見学 →新義州 鴨緑江を徒歩で満洲へ
安東日本人町自由行動 9時旅館帰着 安東泊
5月09日 安東→奉天 奉天市内見学 奉天泊
5月10日 奉天→撫順 撫順炭坑見学 → 奉天 奉天泊
5月11日 奉天市内・北陵・満蒙毛織会社見学 →車中泊
5月12日 →大連→旅順 203高地・博物館・表忠塔・白玉山・東鶏山北堡壘見学
→大連 大連泊
5月13日 港埠頭事務所・満鉄本社・満鉄病院・大連商業学校・沙河口工場
・星ヶ浦・満蒙物資参考館見学 夕方、大連市内自由行動 大連泊
5月14日 大連→ 船中泊
5月15日 船中泊
5月16日 →関門 下関・門司自由行動 → 船中泊
5月17日 →神戸港→兵庫港→小松島→徳島

現在の公立学校の修学旅行が長くても6日を超えないのに対して、彼らの旅行は15泊16日にも及んだ。これは国内修学旅行も同様であり、各校とも2週間程度の旅程が組まれていた。徳島商業学校の大連修学旅行は相当にタイトなスケジュールが組まれている。全日行程中車中泊が3回（神戸→海田市、京城→平壤、奉天→大連）、船中泊が5回（関釜連絡船1泊、大連航路4泊）であった。この中で京城、安東、大連、門司で自由行動が許可されたことが確認されるが、それ以外は基本的に官庁・機関・施設・景勝地を訪問するプログラムが詰め込まれていた。例えば釜山では午前8時10分に上陸10時出発、大邱は午後1時頃到着10時出発、平壤は午前6時前到着、10時出発と滞在時間が僅かであったにもかかわらず、市内の観光地・施設などを駆け足で巡っている（『徳新』5月11日、14日）。

前述の通り大連修学旅行は満鉄鮮満案内所が事前に説明し手配した周遊券と旅館券に基づいて実施された。そのため実施校はどれもよく似たルートをとることとなる。実際、現地で幾つかの学校が離合しながら行程を共にしていた様相を窺い見ることができる。

「（関釜連絡船にて）今夜は熊本商業、香川女子師範と同乗だ。」（『徳新』5月10日）

「（仁川月尾島にて）そこで山口中学と一緒にあった。ずぼんに白線を入れてあって大層

八釜敷いやつだ。」 「(京城の旅館にて) 山口中学校が又先へ休息して居た。」 (『徳新』5月12日)

「(撫順炭坑にて) 此処で私達はお隣の香川女子師範学校の旅行団と一緒にになり、撫順見学総ての行動を共にしてきた。」 (『徳新』5月26日)

「(旅順戦跡にて) 一緒になったものには熊本商業、八幡浜商業、香川女子師範、愛媛女子師範等がある。」 (『徳新』6月3日)

「(大連門司航路にて) 共に乗った福山師範、大分農業、熊本商業、香川女子師範皆甲板へ出て来て輪投げに興じ退屈な海上の昼を過ごしてゐる。」 (『徳新』6月9日)

ここに表れる学校の所在地はすべて西日本である。これは朝鮮・満洲との距離的近さによるものだろう。他校の学生に対して言及することは殆ど無いが、『徳新』5月12日に“山口中学校”の学生に対する対抗心が見えて興味深い。もっともこのくだりは校友会誌に再掲される際には削除されている⁽¹¹⁾。撫順や旅順は大陸修学旅行の中でも欠くことのできない訪問地であったが、ここでは数校の旅行団が一緒に行動した。この内、香川女子師範学校(現、香川大学教育学部)は下関を出てから門司に帰るまでほぼ同一の旅程をたどっている。帰路の大連航路はこの時期の乗客の多くが修学旅行の学生であった様だ。1935年(昭和10年)の女師・高女の旅日記(校友会誌に掲載)には次のように記されている。

「六つの中等学校を満載したこの吉林丸は、正に学生丸の感。あちらにもこちらにも男学生が輪投げに興じてゐる。女なるが故に仲間にも入れて貰へず、船室に引きこんで連日の睡眠不足の取り返し。」⁽¹²⁾

この「満載」「学生丸」という表現から修学旅行シーズンの大連航路が学生で貸し切り状態であったことがわかる。各学校はほぼ同一の旅程をたどる一種のパッケージツアーに参加していたと言えるだろう。女師・高女の日記から男子学生と女子学生の関係性も見えて面白い。

ただしこのようなすべての活動が満鮮案内所を通じた包括的な手配によるものであったわけではない。各訪問地での彼らを実際にサポートしたのは現地で暮らす同校の卒業生や徳島県人会であった。一例を挙げれば、

「(奉天にて) 何の知人もなく頼るべき人もない旅人には、一面識なく唯同県人といふ誼を以て色々と御面倒を見て下された在奉県人の方々がどんなに強く感じたか、どんなに嬉しかったか。」 (『徳新』6月1日)

大邱や平壤という滞在時間が半日に満たない都市も含めて、ほぼ全ての場所で県人会が出迎え、観光案内、食事、歓迎会開催、送迎などの労を執っていた。この後に続く各年の徳島商業学校、女師・高女の旅行も同じであり、その旅日記全体を通じて現地の卒業生・県人会への感謝の気持ちが綴られている。徳島県や現地の県人会としてもこの大陸修学旅行は一大イベントなのであった。

②学生たちの見た外の世界そして徳島

先ず彼らは各地の神社（仁川、京城、平壤）を参拝、さらに日清戦争・日露戦争に関する戦跡を訪問した。仁川では日露開戦発端となったロシア艦撃沈の講話を聞き（『徳新』5月12日）、平壤では日清戦争時の原田重吉一番乗りの玄武門を見学した（『徳新』5月14日）。そして満洲では相当の紙幅を割いて旅順戦跡見学の様子を叙述している。特に四国出身の兵で構成された第11師団が攻撃した東鶏冠山北堡壘では、

「此処ぞ明治三十七年十二月十八日我が十一師団決死隊の占領せし処なるぞ！ おおペトンの大堡壘よ！ これに投げられし我軍の肉弾や如何ならん。何も知らずに打出されるマキシム機関銃に倒れ行く我軍の果敢なさ、俯仰佇立正しく断腸の感がある。……。」（『徳新』6月5日）

と特別の感慨をもって記している。

これらの戦いによって獲得された植民地、権益についてはその発展と成長、統治の“成功”を誇らしく叙述している。仁川の港湾施設、京城の都市建設、大連港の発展などが取り上げられるが、中でも撫順炭坑はこの大陸修学旅行の大きな目的の一つであり一同はその巨大さに驚嘆の声を上げた。また病院などの設備が徳島では及びも付かない点を書き添えられている。

「駅の前には撫順町行の電車が走ってゐる。之に乗って私達は先づ炭鉱事務所へ飛び込んだ。事務所といっても三層の花崗岩造り、全く厩大なものである。此処の講堂で撫順炭鉱に付いていささか予備知識を賜った。事務所の前にはこれと同等位の支那病院が建築中で、全く徳島では夢にも描けない。……。一世に名だたる露天掘炭坑は駅のすぐ傍である。おお俯瞰せよ！ 覗けよ！ この雄大な露天掘の偉大さを！ 目に見ゆる処、踏む処、觸るる処総て石炭ばかりである。地下幾千尺の下で働く坑夫は日の光も見ず命を賭して働いてゐるのに、此処で働く坑夫ばかりは皆暖かい春の慈悲光を受けて皆せせせせと働いてゐる。皆幸福さうである。幸福に輝いた労働者は、南支から逃れてきた人もあらうがどんなに嬉しい事だらう。この厩大な露天掘が更に今の二倍大に拡大されてゐる。」（『徳新』5月26日）

このようにして学生は多大な犠牲を引き換えに得た満洲の権益に対する認識を深め、その発展に日本人として胸を張るのである。この4年後、1931年（昭和6年）の満洲事変に際し、多くの人びとは「十万の生霊と二十億の国帑」をもって得られたこの権益を断固守るべしと熱狂した。大陸への修学旅行もまた学生たちにその観念を確信させる役割を果たしたと考えられる。

当然の事ながら朝鮮も満洲も本来は日本人の大地ではなかった。日記からはそこを武力をもって獲得したことに対する疑問も内省も感じられないが、同時に現地の人びとに対して人種的偏見もそれほど見いだせない。初めて訪れた朝鮮や満洲の人びとに興味津々の目を向けて純粋に驚く様が見える。朝鮮では「棧橋には白色の朝鮮服を着た朝鮮人が多数立って居る」姿を釜山上陸の最初の印象として記した。続けて「朝鮮人の呑気なのに愕く」「家の前に腰を下して長い煙管で煙草をプカプカ吹かして居る」と観察している。大邱で

も「鮮人家屋は立派なものは瓦屋根でそれて居る。床下にはオンドルが通って居る。普通以下のものは藁葺の平家建だ。道路は徳島のよりずっと広い」（『徳新』5月11日）と、街の風景から朝鮮と日本・徳島との文化の違いに気付いたようだ。

京城（ソウル）では朝鮮人の子供たちの教育現場を参観する機会があった。

「……京城普通学校を参観。授業が終った後であったが、特別に六年生二組を残して観せて下さった。国語をやって居た。上手に読む。先生が誰か読みなさいといふと全部手を挙げる。時々カキクケコ、タチツテト、タヂヅデドなど基本発音をやらして居た。ツが言い難ひ様で或生徒はスと発音して居た。なかなか日本人に負けない。然し朝鮮人同志で話す時には朝鮮語を使ってゐる。」（『徳新』5月13日）

後にこの文章が校友誌に再掲される際、朝鮮の子供たちが朝鮮人同士で話す時には朝鮮語を使うというくだりの後に「我等が英語を習って滅多に使はない様なものか？」と文を補っている⁽¹³⁾。植民地統治下の朝鮮の子供たちが日本語を学ぶことに対する疑念はない。しかし否応なく日本語を学ばざるを得ない彼らと、英語を学んでいる自分たちとの共通点を見出したようだ。

朝鮮より満洲に入ってから岡田俊太郎氏の執筆担当である。彼は満洲の大地について次の様な印象を得た。

「満洲の広野を走る汽車、鐘を鳴らして走って行く。この鐘の音がとても大陸的で大陸の風趣を一層そそり立てて旅人の心にひそんだ旅愁を慰めてくれる。」「（奉天にて）車道の両側には赤シヤの立樹が延々と茂り全く欧州へでも来てゐる様な感じがする。旅館へ行く道々白色人種の夫婦共が沢山散歩をしてゐて異国の感がひしひしと身に迫ってくる。」（『徳新』5月22日）

「（奉天・北陵から市内への帰り道にて）何時の間にもやら服は満洲砂で真赤、全く満洲ならではできぬ事。本当に満洲気分タップリよ。」（『徳新』6月1日）

多くの日本人がそうであったように、彼らも満洲の広大な大地、異国情緒あふれる市街に旅情を感じた。現地の人びとに対しては次のように描写をしている。

「（大連にて）道行く可愛い坊ちゃん嬢ちゃん、絶域花は稀ながら清く咲いた大和撫子は高く高く異境の天地に香ってゐる。行き交ふ支那人髪を長くたらしめたテヨンガー、前髪たらしめた可愛い娘、風にもなよぐ纏足の女、総てが支那の表現である。前髪たらしめた乙女の姿は可愛い、耳に下げたヒスイの耳輪は高貴である。美しく模様づけられた緞子地の服着た乙女は美しい。」「雨はれの夜は輝く街灯に映えた町へ土産の買物に出掛け行く。昼に引きかへ夜の大連は一入賑やかである。灯ともし頃になると何処からともなく支那人の露天店が街路狭く張出して来る。双手抜ける迄に買はれてきた土産は宿屋の部屋狭く、ならんでゐる。」（『徳新』6月7日）

行き交う人びとの姿など街の様子を物珍しく観察し、夜には中国人街の喧騒の中で買い物を楽しんだ。女性の描写からは彼らの抱く素直な感想、中国文化をそのまま受け止める姿勢が看取される。

しかし現地で見聞した全てに肯定的であったわけではない。この頃数年連続して中国本土では自然災害が発生し、多くの避難民が満洲へと流入してきた。その情景について言及する箇所がある。

「それに南支の状態があのような様であるから、支那農民の避難が多く、撫順線の一番列車なんか何時も鈴なりで、満鉄の方は何時も避難民輸送の為貨車の四五十輛も連結した臨時列車を出して輸送してきたそうであるが、それでも運び切れなかったとの事。……。そして其の避難民の臭い事臭い事、全くお話にならないさうである。その為か私達の乗ってゐる客車の臭い事臭い事これ又お話にならない。文読む人の缺乏は斯の如く自ら国を乱し自ら苦しんで自ら亡んでゆく。実に今は哀れである。支那農民は可哀さうである。一年中の汗と力の代償として与へられたものは皆奪はれてしまひ、馬はとられ頼むは満洲と許り皆日本の勢力圏へと流れ込んでくる。早く誰か孔子か孟子の如き偉人よ出でて虐げられたこの哀れな農民を救ってやれ。」（『徳新』5月24日）

彼らは満洲へと逃れてきた人びとの不潔さに嫌悪感を隠さない。先の撫順炭坑の情景描写でも「幸福に輝いた労働者は、南支から逃れてきた人もあらうが」とあった。実際、避難民・労働者の出身地は華北であったので、この点は事実誤認である。冒頭の「南支の状態があのような様」というのは中国での所謂“北伐”の進行を指している。中国本土ではこの過程で各地の督軍（軍閥）が解体され、同時にナショナリズムの高揚により外国の権益との衝突が表面化していた。彼らは中国本土（南支）の混乱と安定・成長する東北（満洲）とを対比し前者の混乱を「可哀さう」と評価する。満洲は張作霖政権の支配下にあり、日本は遼東半島先端の関東州そして満鉄附属地を中心として勢力を保持していた。1928年（昭和3年）末に南京国民政府による中国統一が完成するが、学生たちが旅行をしたのはその前年、情勢が緊迫度を増していた時であった。

後半で彼は中国を救う「孔子か孟子の如き偉人」の出現を願っている。これは中国を停滞的な社会と見る当時の日本人の一般的な理解を反映したものであろう。彼らの中国像は一種古典的な世界観が基調であった。だが中国を統一に導いたの古の聖人ではなく蒋介石を首とする政治家・官僚・軍人たちであった。中国に対する悪意がなく同情的であろうとも、その翌年に実現する南京国民政府による中国統一にいたる過程を読み切れないところに、多くの日本人の中国理解の限界があった。もっとも一介の中学生にそれを求めることは酷であろう。しかし彼の感想は当時の日本で広く共有されるもので、そこに一種の優越感があることもまた事実である。これが昂じた時、人びとの中には中国への干渉を当然と考える風潮が生じうる。この点は以下、「おわりに」で再論したい。

おわりに

そして彼らは大連より帰国の途についた。この旅行で彼らは何を得たのだろうか。旅日記の執筆者岡田氏の弁を借りるならば、

「清く晴れた昭和二年五月十四日の空には早くも朝日は輝いてゐる。今日は異国の空を離

れる時よ。午前十時幾多の県人先輩の方々の御見送りを受けて二百余人の県人の住む大連を去って行く。……

さらばさらば県人の方々よ 懐かしの故郷は鎖国の阿波 進取の気とぼしき島人に
好き模範を示してあれ。」（『徳新』6月8日）

と、各地でサポートしてくれた県人への感謝とともに、県外に足を踏み出すことに消極的な県民性に対する慨嘆があった。この閉鎖的な徳島という言説は些か紋切り型であり、現在に至るまで広範に見られるものである。旅日記は次のように締めくくられる。

「四時半無事に十六日ぶりの懐しい徳島の地を踏んだ。奉天大連の大都会に見馴れた目には小松島の駅は安奉線の山中の一小駅としか写ってこない。鼻つく様な日本の国、小さい汽車、あの汽笛が何だか悲鳴をあげてゐる様に聞こえてくる。……。其の旅行が僅か半月にしろ、遠く満洲まで学びに出掛けた我等徳商健児の意や偉とすべきである。世は昭和の聖代に照されし御代なるぞ！ 高く掲げられたモットーは曰く『日進日新』である。我等の遠く満洲まで修学旅行に行ったのも全く時勢の然らしむる処である。今後の日本を双肩に荷ふ者として時代の趨勢に遅れては御国に対してすまない。阿波の人々の海外雄飛の気象乏しきは正しく時勢に反してゐる事夥し。日本の現状を見る時は誰か安々としてこの祖国に止る事を得ようや。……。」（『徳新』6月10日）

前節で述べたように出発前の徳島商業学校の学生は「鮮満へ行っても悪くはないが、矢張り手近な関東地方へでも行く方が面白いよ」と考えていたが、2週間の大陸修学旅行を終えた彼らの考えは大きく変わっていた。日本の国土の狭さを身をもって体験した彼らは閉鎖的な徳島を飛び出し大陸・海外へ“雄飛”する気概を語る。旅は確かに学生たち様々な啓発を与えその世界観に影響を与えたようだ。自分たちと異なる社会や文化に興味を示し、自らを振り返るという効果はあっただろう。

一方で中国本土の政治状況に関する学生の認識はそれほど深くはなかったようだ。またこれまでの戦争によって獲得された権益や植民地を当然のものとして微塵も疑いの目を向けることはなかった点も看取される。そこに戦前期日本の帝国主義的拡大を肯定する意識を見出すことは難しくない。今日的な視点に基づくならば、このような“草の根のファシズム”としての民衆の心性が大陸進出を支え、中国との衝突を激化させ、そして戦争という破局に至ったのである。多くの日本人がそうであるように、自らの帝国主義的拡大を正当化しながらも、東アジアの民族主義の勃興と近代国家の形成に思いを寄せる視点に弱いという点が、戦前期日本の“グローバル化”のいびつな一側面であった。

1920年代の後半は戦間期の協調外交が動揺する時期として位置づけられる。田中義一内閣の政策は対華強硬路線へと転じていた。彼らの旅日記が連載されていた5月27日に、日本は居留民保護を名目に北伐への干渉、山東への出兵を決定した。所謂、第一次山東出兵である。だが当時の徳島にも中国の情勢を正確に理解し、この出兵に対する異論を提起する者がいた点は指摘しておきたい。徳島商業学校の学生が徳島に帰った2週間後の『徳島毎日新聞』昭和2年6月1日の社説「非国民呼はり」は政府の出兵に次のような論評を加

えた。

「今度支那への出兵に就いて、其の理由の乏しい事を論じたに対して、同業日日（筆者注：徳島日日新報）は、之を以て自主的外交も、国威国権も忘れ者であるかの如く論じ、甚しきは出兵反対の人を以て、共産党と通謀する非国民であると罵ってゐる。……。

今済南地方へ押寄せんとするのは、其の国民政府の軍隊である。共産主義の者とは反対に立ってゐる者である。而して日本の出兵は、其の国民軍が、武力革命を遂行するに邪魔になるから、国民党の政府は之を悦ばぬのである。……。只国民政府の居留民保護といふ事が、完全に出来るか否やといふ点に於て疑があるばかりで、之は十分に信頼する事は出来ないと思ふ。けれども其れを以て出兵の理由とはならないのである。……。自主的外交といふのは、国際上の無理をせず、正当なる権利を主張して、他の強大国の鼻息を窺うたりせない事を云ふに過ぎない。支那へ対して勝手な振舞をすることが何の自主的であるか。

……

我国には、何かといふと不敬呼はりをして、言論の自由を束縛せんとすに卑怯者がある。……。何かと云ふと非国民呼はりするのも、此の卑怯者と同じ心理の奴輩だ。非国民といふ言葉が許さるるならば、不道德な行為をなし、酒に呑んだくれ、色を漁り、国家に損害を与へてゐる者こそ非国民だ。○○費を私したり、○○事件を起したりする者こそ大々非国民ではないか。」

徳島毎日新聞の編集者は中国の北伐に対する干渉には慎重であるべきという立場を取っている。これに対して徳島日日新報は積極的な干渉を主張し、合わせて徳島毎日新聞を攻撃した。これに対して本社説は自主的外交を唱えつつも中国の国民政府の主権を尊重しない政府とそれに快哉を叫ぶ世論を論難している。加えて譲歩や宥和を説く人びとを非国民・不敬として圧殺しようとする体制迎合的“同調圧力”を批判している点が興味深い。これは国民大衆に愛国を強制し、政治批判を反日と罵倒し、○○費を私する令和日本の政治風景にも通底するものがある。

徳島商業学校の学生たちが朝鮮・満洲で得た感動、帰徳後に抱いた海外雄飛の心情も日本帝国の勢力拡張と無縁ではあり得なかったが、一方で国際社会の中の日本、協調外交という感覚も人びとの間で共有されていた。この段階では帝国主義的拡大に疑念を投げかけ内省を促す人びとも徳島の市井におり、昭和初年の世論はまだ硬直化しておらず多様な言説が語られていたのである。

- 徳島県中学・高等学校等修学旅行関係記事（学校別）
- ・『徳島毎日新聞』大正15年～昭和15年修学旅行シーズン（4月～6月）徳島県立図書館蔵書状況
- 1926年（大正15年）4月12日、5月13-31日、6月3,5,9,16,18-20,23日。
- 1927年（昭和2年）4月2,3,5,6,8,9,11,13-29日、5月1-31日、6月1-30日。
- 1928年（昭和3年）4月1-3,5-29日、5月1-19,21-25,27-31日、6月1-30日。
- 1929年（昭和4年）未所載。
- 1930年（昭和5年）4月6,7,3,11,16,21,27日、5月6,7日、6月15,16,18-23,25,28-30日。
- 1931年（昭和6年）4月5日未所載、6月20日のみ所載。
- 1932年（昭和7年）未所載。
- 1933年（昭和8年）4月未所載、5月20,21日、6月2,26,28-30日。
- 1934年（昭和9年）4月11-13,18-29日、5月2-5,7-9,11,13,14,16-19,21,22,24日、6月2-25,28日。
- 1935年（昭和10年）4月5-29日、5月1-13,15-31日、6月欠号なし。
- 1936年（昭和11年）4月1-3,5-29日、5月6月欠号なし。
- 1937年（昭和12年）4月未所載、5月欠号なし、6月13-30日。
- 1938年（昭和13年）4月3-30日、5月1-30日、6月30日のみ所載。
- 1939年（昭和14年）4月未所載、5月1-30日、6月欠号なし。
- 1940年（昭和15年）4月1-3,5-25,27-29日、5月6月欠号なし。

昭和9年度徳島県修学旅行関係記事

学校略称	掲載日時	ページ	地点など
女師・高女	S9/5/8	3	高洲・朝鮮
女師・高女	S9/5/13	3	高洲・朝鮮（野望）
女師・高女	S9/5/16	3	高洲・朝鮮（パレー）
女師・高女	S9/5/17	9	高洲・朝鮮
女師・高女	S9/5/19	2	高洲・朝鮮
女師・高女	S9/5/13	5	東京
徳島中▲	S9/5/13	2	九州
富岡高女	S9/5/17	9	東京
富岡高女	S9/5/19	2	東京
美尾高女	S9/5/19	1	東京
普賢高女	S9/5/18	3	東京
普賢高女	S9/6/2	5	東京
普賢高女	S9/6/3	9	金沢
普賢高女	S9/6/4	1	京都
徳島商▲	S9/5/24	2	東京
徳島商▲	S9/6/2	4	東京
徳島商▲	S9/6/3	9	甲州
小松島高女	S9/6/2	8	東京
小松島高女	S9/6/4	2	
小松島高女	S9/6/5	4	
小松島高女	S9/6/6	5	
讃岐高女	S9/6/2	4	東京
讃岐高女	S9/6/3	9	
讃岐高女	S9/6/4	3	
讃岐高女	S9/6/8	1	

昭和10年度徳島県修学旅行関係記事

学校略称	掲載日時	ページ	地点など
普賢高女	S10/6/5	5	東京・島津津
普賢高女	S10/6/8	2	岡山
小松島高女	S10/5/29	9	名古屋
小松島高女	S10/5/30	9	福岡
小松島高女	S10/6/1	9	東京
小松島高女	S10/6/2	8	東京
小松島高女	S10/6/4	10	善光寺・京都
小松島高女	S10/6/5	9	京都・小松島へ

昭和11年度徳島県修学旅行関係記事

学校略称	掲載日時	ページ	地点など
徳島中▲	S11/4/13	5	九州へ
徳島中▲	S11/4/15	1	広島
徳島中▲	S11/4/18	9	博多
徳島中▲	S11/4/19	2	熊本
徳島中▲	S11/4/21	9	阿蘇
徳島中▲	S11/4/22	1	九州
徳島中▲	S11/4/23	5	九州
徳島中▲	S11/4/24	1	六甲
徳島商▲	S11/4/28	4	高洲・朝鮮へ
徳島商▲	S11/5/1	9	京阪
徳島商▲	S11/5/2	5	平塚
徳島商▲	S11/5/4	2	東京
徳島商▲	S11/5/5	9	新卒
徳島商▲	S11/5/6	2	東京
徳島商▲	S11/5/9	9	東京・旗原
徳島商▲	S11/5/10	1	大連
徳島商▲	S11/5/15	7	高洲・朝鮮上り組園
女師・高女	S11/5/8	9	高洲・朝鮮 その1
女師・高女	S11/5/9	1	高洲・朝鮮 その2
女師・高女	S11/5/12	9	高洲・朝鮮 その3
女師・高女	S11/5/14	1	高洲・朝鮮 その5
女師・高女	S11/5/15	5	高洲・朝鮮 その6
女師・高女	S11/5/16	5	高洲・朝鮮 その7
女師・高女	S11/5/18	5	高洲・朝鮮 その8
女師・高女	S11/5/18	2	高洲・朝鮮 その9
女師・高女	S11/5/19	9	高洲・朝鮮 その10
女師・高女	S11/5/23	9	高洲・朝鮮 その11/12
女師・高女	S11/5/24	1	高洲・朝鮮 その13/14/15
女師・高女	S11/5/13	9	京都
女師・高女	S11/5/15	9	上野坊
女師・高女	S11/5/17	2	東京
女師・高女	S11/5/19	6	日光
女師・高女	S11/5/21	9	江ノ島
女師・高女	S11/5/22	9	箱根
讃岐高女	S11/5/7	10	関東 5/28-6/8
讃岐高女	S11/6/10	5	日光・中禅寺
讃岐高女	S11/6/12	9	湯春

学校略称	掲載日時	ページ	地点など
徳島中▲	S10/4/17		修学旅行より帰着
女師・高女	S10/5/4	2	高洲・朝鮮
女師・高女	S10/5/9	9	高洲・朝鮮
女師・高女	S10/5/12	9	高洲・朝鮮
女師・高女	S10/5/13	1	高洲・朝鮮
女師・高女	S10/5/16	5	高洲・朝鮮
女師・高女	S10/5/20	1	高洲・朝鮮
女師・高女	S10/5/21	9	高洲・朝鮮
女師・高女	S10/5/22	8	高洲・朝鮮
女師・高女	S10/5/7	2	東京
女師・高女	S10/5/10	2	東京
女師・高女	S10/5/16	1	日光
女師・高女	S10/5/17	10	東京
女師・高女	S10/5/18	9	東京
女師・高女	S10/5/20	2	関東
女師・高女	S10/5/20	4	関東
美尾高女	S10/5/11	9	関西
美尾高女	S10/5/26	9	日光
美尾高女	S10/5/27	9	東京
美尾高女	S10/5/28	5	大阪
徳島商▲	S10/5/17	10	東京
徳島商▲	S10/5/20	8	静岡
徳島商▲	S10/5/21	10	安知
徳島商▲	S10/5/23	1	東京
徳島商▲	S10/5/26	9	東京・大島
富岡高女	S10/5/17	9	二見
富岡高女	S10/5/18	5	伊勢・名古屋
富岡高女	S10/5/21	9	東京
富岡高女	S10/5/22	1	東京
富岡高女	S10/5/27	5	京都・大阪
富岡高女	S10/5/30	5	鎌倉・東京
徳島商▲	S10/5/24	2	高洲・朝鮮
徳島商▲	S10/5/28	2	高洲・朝鮮
徳島商▲	S10/5/31	9	高洲・朝鮮
徳島商▲	S10/6/11	5	高洲・朝鮮
徳島商▲	S10/6/12	10	高洲・朝鮮
徳島商▲	S10/6/2	5	高洲・朝鮮
徳島商▲	S10/6/4	5	高洲・朝鮮
徳島商▲	S10/6/6	5	高洲・朝鮮
徳島商▲	S10/6/7	1	高洲・朝鮮
徳島商▲	S10/6/8	2	高洲・朝鮮
福部中▲	S10/5/26	5	神戸・大阪
普賢高女	S10/5/26	2	奈良・二見
普賢高女	S10/5/28	5	伊勢・名古屋
普賢高女	S10/6/1	9	日光
普賢高女	S10/6/10	9	京都
普賢高女	S10/6/4	2	東京

讃岐高女	S11/6/3	2	京都・奈良
讃岐高女	S11/6/4	5	伊勢・志保
讃岐高女	S11/6/7	9	箱根
讃岐高女	S11/6/9	1	鎌倉
富岡高女	S11/5/11	5	東京 5/9-5/21
富岡高女	S11/5/14	5	
富岡高女	S11/5/15	9	奈良
富岡高女	S11/5/18	5	秩父
富岡高女	S11/5/19	6	東京
富岡高女	S11/5/20	9	東京
富岡高女	S11/5/24	5	善光寺・金沢
富岡高女	S11/5/27	9	京都
美尾高女	S11/5/13	9	京都
美尾高女	S11/5/16	8	京都
美尾高女	S11/5/19	9	京都・二見
美尾高女	S11/5/21	9	伊勢・東京
美尾高女	S11/5/26	2	東京
美尾高女	S11/5/27	8	日光
美尾高女	S11/5/28	5	東京・大阪
徳島商▲	S11/5/14	9	善光寺
徳島商▲	S11/5/15	5	東京
徳島商▲	S11/5/17	9	箱根
徳島商▲	S11/5/20	9	伊勢
徳島商▲	S11/5/18	2	名古屋
徳島商▲	S11/5/22	10	京都・箱根
徳島商▲	S11/5/24	9	関東
徳島商▲	S11/5/25	1	関東
富岡高女	S11/5/25	1	
富岡高女	S11/5/29	9	伊勢
富岡高女	S11/5/30	1	箱根
富岡高女	S11/6/2	1	東京
富岡高女	S11/6/5	9	日本海側
富岡高女	S11/6/6	5	京都
富岡高女	S11/6/8	2	宝塚

昭和12年度徳島県修学旅行関係記事

学校略称	掲載日時	ページ	地点など
徳島商▲	S12/5/1	5	高洲・朝鮮 出発 5/1~
徳島商▲	S12/5/5	2	高洲・朝鮮
徳島商▲	S12/5/7	9	高洲・朝鮮
徳島商▲	S12/5/11	2	【記事】新卒視察
徳島商▲	S12/5/11	2	高洲・朝鮮
徳島商▲	S12/5/14	2	高洲・朝鮮
徳島商▲	S12/5/17	2	高洲・朝鮮
徳島商▲	S12/5/18	9	高洲・朝鮮
女師・高女	S12/5/1	2	高洲・朝鮮 出発 5/1~
女師・高女	S12/5/5	2	高洲・朝鮮
女師・高女	S12/5/7	9	高洲・朝鮮

女師・高女	S12/5/8	9	満洲・朝鮮
女師・高女	S12/5/11	2	【記事】新東京視察
女師・高女	S12/5/11	9	満洲・朝鮮
女師・高女	S12/5/13	9	満洲・朝鮮
女師・高女	S12/5/14	2	満洲・朝鮮
女師・高女	S12/5/16	2	満洲・朝鮮
女師・高女	S12/5/18	2	満洲・朝鮮
女師・高女	S12/5/20	1	満洲・朝鮮
女師・高女	S12/5/22	2	東京
女師・高女	S12/5/11	9	東京
女師・高女	S12/5/12	9	東京
女師・高女	S12/5/13	2	東京
女師・高女	S12/5/15	9	東京
女師・高女	S12/5/16	9	東京
女師・高女	S12/5/17	2	東京
女師・高女	S12/5/19	9	東京
三好高女	S12/5/6	9	伊勢
三好高女	S12/5/11	2	名古屋
三好高女	S12/5/15	2	日光
福岡高女	S12/5/11	2	出発 5/8～
福岡高女	S12/5/12	9	奈良
福岡高女	S12/5/15	9	奈良
福岡高女	S12/5/16	9	小田原
福岡高女	S12/5/18	9	扶桑
福岡高女	S12/5/20	5	
福岡高女	S12/5/21	1	
徳島商業▲	S12/5/19	6	大阪・京都
徳島商業▲	S12/5/20	9	
徳島商業▲	S12/5/22	9	東京
徳島商業▲	S12/5/23	9	上野
徳島商業▲	S12/5/25	5	木曾
音楽高女	S12/5/28	5	
音楽高女	S12/5/30	1	
音楽高女	S12/6/15	9	
名西高女	S12/5/29	1	
名西高女	S12/5/31	2	奈良・伊勢

昭和13年度徳島県修学旅行関係記事

学校略称	掲載日時	ページ	地点など
徳島商業▲	S13/5/5	2	満洲・朝鮮 5/3～
徳島商業▲	S13/5/6	9	満洲・朝鮮
徳島商業▲	S13/5/12	10	満洲・朝鮮
徳島商業▲	S13/5/13	10	満洲・朝鮮
徳島商業▲	S13/5/14	10	満洲・朝鮮
徳島商業▲	S13/5/16	9	小田原
徳島商業▲	S13/5/18	10	満洲・朝鮮
徳島商業▲	S13/5/21	7	満洲・朝鮮
女師・高女	S13/5/6	2	満洲・朝鮮・東京 5/6～

女師・高女	S13/5/7	9	満洲・朝鮮・東京 出発
女師・高女	S13/5/8	9	関西・関東
女師・高女	S13/5/11	10	満洲・朝鮮
女師・高女	S13/5/12	10	満洲・朝鮮
女師・高女	S13/5/15	6	満洲・朝鮮
女師・高女	S13/5/16	7	満洲・朝鮮
女師・高女	S13/5/17	10	満洲・朝鮮
女師・高女	S13/5/18	10	満洲・朝鮮
女師・高女	S13/5/22	10	満洲・朝鮮
女師・高女	S13/5/23	6	満洲・朝鮮
女師・高女	S13/5/10	10	関東・関西
女師・高女	S13/5/11	7	関東・関西
女師・高女	S13/5/12	7	関東・関西
女師・高女	S13/5/13	10	関西・関東
女師・高女	S13/5/14	2	旅行第二陣出発
女師・高女	S13/5/14	6	関東・関西
女師・高女	S13/5/15	6	関西・関東
女師・高女	S13/5/16	7	関西・関東
女師・高女	S13/5/17	10	関西・関東
女師・高女	S13/5/18	7	関西・関東
女師・高女	S13/5/19	9	関西・関東
女師・高女	S13/5/20	9	関西・関東
女師・高女	S13/5/22	10	関西・関東
女師・高女	S13/5/26	10	関西
三好高女	S13/5/8	5	二見・名古屋
三好高女	S13/5/10	10	
三好高女	S13/5/12	10	
三好高女	S13/5/13	6	
三好高女	S13/5/14	9	
三好高女	S13/5/16	5	
三好高女	S13/5/18	7	
音楽高女	S13/5/9	5	関西・関東
音楽高女	S13/5/12	7	
音楽高女	S13/5/14	10	
音楽高女	S13/5/16	7	
音楽高女	S13/5/17	10	
音楽高女	S13/5/18	10	
音楽高女	S13/5/20	10	
音楽高女	S13/5/22	10	
三好高女	S13/5/8	5	二見・名古屋
三好高女	S13/5/10	10	
三好高女	S13/5/12	10	
三好高女	S13/5/13	6	
三好高女	S13/5/14	9	
三好高女	S13/5/16	5	
三好高女	S13/5/18	7	
音楽高女	S13/5/9	5	関西・関東
音楽高女	S13/5/12	7	
音楽高女	S13/5/14	10	
音楽高女	S13/5/16	7	
音楽高女	S13/5/17	10	
音楽高女	S13/5/18	10	
音楽高女	S13/5/20	10	
音楽高女	S13/5/22	10	
徳島商業▲	S13/5/11	5	
奥平高女	S13/5/15	10	
名西高女	S13/5/28	10	東京
名西高女	S13/5/29	10	東京

昭和14年度徳島県修学旅行関係記事

学校略称	掲載日時	ページ	地点など
徳島商業▲	S14/5/8	2	満洲・朝鮮
徳島商業▲	S14/5/9	1	満洲・朝鮮

徳島商業▲	S14/5/11	1	満洲・朝鮮
徳島商業▲	S14/5/13	1	満洲・朝鮮
徳島商業▲	S14/5/14	1	満洲・朝鮮
徳島商業▲	S14/5/16	4	満洲・朝鮮
徳島商業▲	S14/5/18	2	満洲・朝鮮
徳島商業▲	S14/5/19	1	満洲・朝鮮
徳島商業▲	S14/5/25	1	東京
福岡高女	S14/5/9	1	福根
福岡高女	S14/5/12	6	福根
福岡高女	S14/5/13	9	江ノ島・東京
福岡高女	S14/5/14	2	日光
福岡高女	S14/5/17	9	東京
福岡高女	S14/5/18	1	東京
福岡高女	S14/5/20	5	日光
音楽高女	S14/5/22	1	東京
音楽高女	S14/5/23	2	長野・金沢
音楽高女	S14/5/27	9	徳島へ
音楽高女	S14/5/29	4	徳島へ
女師・高女	S14/5/14	2	満洲・朝鮮 5/17出発
女師・高女	S14/5/23	1	満洲・朝鮮
女師・高女	S14/5/26	2	満洲・朝鮮
女師・高女	S14/5/27	9	満洲・朝鮮
女師・高女	S14/5/29	2	満洲・朝鮮
女師・高女	S14/6/3	9	満洲・朝鮮
女師・高女	S14/6/4	2	満洲・朝鮮
女師・高女	S14/5/24	1	奈良
女師・高女	S14/5/26	1	伊勢・名古屋
女師・高女	S14/5/28	1	富士
女師・高女	S14/5/30	8	江ノ島・日光
女師・高女	S14/6/1	5	東京
女師・高女	S14/6/3	1	東京
徳島商業▲	S14/5/16	4	伊勢・名古屋
徳島商業▲	S14/5/18	2	名古屋・江ノ島
徳島商業▲	S14/5/20	5	東京
徳島商業▲	S14/5/22	2	東京
徳島商業▲	S14/5/25	2	
徳島商業▲	S14/5/23	1	福根
徳島商業▲	S14/5/29	2	徳島
徳島商業▲	S14/5/30	1	京都・大阪
名西高女	S14/5/24	1	九州
名西高女	S14/5/26	2	九州
名西高女	S14/5/27	9	九州
名西高女	S14/5/29	4	九州
名西高女	S14/6/1	5	九州
徳島高女	S14/5/28	1	日光

徳島高女	S14/6/11	1	東京
徳島高女	S14/6/14	9	日光 帰路へ
徳島高女	S14/6/5	2	奈良・京都
徳島高女	S14/6/17	5	名古屋
徳島高女	S14/6/8	5	福根・伊賀
徳島高女	S14/6/9	1	江ノ島

昭和15年度徳島県修学旅行関係記事

学校略称	掲載日時	ページ	地点など
音楽高女	S15/5/5	2	5/4～ 出発
音楽高女	S15/5/9	2	大塚立・京都
音楽高女	S15/5/11	8	
音楽高女	S15/5/14	8	
音楽高女	S15/5/17	8	
音楽高女	S15/5/18	8	
音楽高女	S15/5/19	6	
音楽高女	S15/5/19	1	
音楽高女	S15/5/23	8	
音楽高女	S15/5/20	1	東京
福岡高女	S15/5/11	1	東京
福岡高女	S15/5/12	7	
福岡高女	S15/5/14	5	
福岡高女	S15/5/17	5	東京
徳島商業▲	S15/5/13	7	奈良
徳島商業▲	S15/5/14	6	名古屋
徳島商業▲	S15/5/17	1	東京
徳島商業▲	S15/5/19	5	東京
女師・高女	S15/5/20	3	【記事】6/4出発許可出す
阿波中学校▲	S15/5/20	8	聖地巡拝
阿波中学校▲	S15/5/22	8	聖地巡拝
阿波中学校▲	S15/5/23	7	
阿波中学校▲	S15/5/25	8	
音楽高女	S15/5/29	6	
音楽高女	S15/5/30	7	扶桑
音楽高女	S15/6/3	7	東京
徳島高女	S15/6/4	8	日光
徳島高女	S15/6/5	8	
徳島高女	S15/6/6	7	
徳島高女	S15/6/5	8	奈良
徳島高女	S15/6/8	8	
徳島高女	S15/6/9	4	
徳島高女	S15/6/10	7	東京
徳島高女	S15/6/14	7	京都
徳島高女	S15/6/15	7	京都
徳島高女	S15/6/16	7	大阪・徳島

凡例 ▲用：中学校・商業学校・農業学校 高女：高等女学校 女師：女子師範学校
 出典：『徳島毎日新聞』（徳島県立図書館蔵）

(1)星野朗「修学旅行の歴史（戦前の部）」『地理教育』26、1997年。

(2)関儀久「明治期の地方商業学校に於ける海外修学旅行について：熊本商業学校・函館商

業学校の事例を中心に」『教育学研究』82-2、2015年。

(3)高媛「戦勝が生み出した観光：日露戦争翌年における満洲修学旅行」『Journal of Global Media Studies』7、2010年。

(4)高岡裕之「観光・厚生・旅行：ファシズム期のツーリズム」(赤澤史朗・北河賢三『文化とファシズム：戦時期日本における文化の光芒』日本経済評論社、1993年所収)。

(5)ケネス・ルオフ『紀元二千六百年：消費と観光のナショナリズム』朝日新聞出版、2010年。

(6)荒武達朗「大正・昭和期徳島の海外留学生：東亜同文書院で学んだ県人」『異文化に照らし出された四国：外国人ならびに国際的に活躍した四国出身者の残した文献の調査・研究から』(総合科学部創生研究プロジェクト経費・地域創生総合科学推進経費報告書)2019年。徳島大学附属図書館リポジトリ (<https://repo.lib.tokushima-u.ac.jp/ja>) にて公開。

(7)前掲高媛、2010年、文末附表。城南高校百年史編纂委員会『徳島中学校城南高校百年史』城南高校百年史編纂委員会、1975年、p.96(同校校友誌『渦の音』12号、1906年に依拠、筆者未見)。

(8)井上銀晴編『続・帰らざるふるさと徳島』私家版、1974年、pp.220-221。

(9)徳島県女子師範学校・徳島県立徳島高等女学校『創立四十周年記念沿革史』同、1942年、pp.51-52。

(10)徳島商業高等学校『徳商五十年史』同、1960年、pp.147-154。豊川章一「徳商昭和二年度鮮満旅行記」『徳島毎日新聞』1927年(昭和2年)5月6日。

(11)前掲徳島商業高等学校『徳商五十年史』1960年、pp.151-152に引用。原典筆者未見。

(12)「朝鮮満洲への旅」『後彫』35、1936年、p.160。

(13)前掲徳島商業高等学校『徳商五十年史』1960年、p.153。